

大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構

ひらけゆく世界 見えてくる人間  
フォーラム人文学  
2024.03 No.21



大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構  
**Society for Promotion of  
Education at School of  
Literature and Human  
Sciences,  
Osaka Metropolitan  
University**

## 目次

巻頭言	p. 3
2023 年度支援機構の企画・活動一覧	p. 4
2023 年度卒業論文題目一覧	p. 6
2023 年度修士・博士論文題目一覧	p.11
2023 年度支援機構研究奨励賞論文一覧	p.13
運営委員会組織図・運営委員	p.14
2022 年度決算・2023 年度予算	p.16
教育促進支援機構会則	p.18
編集後記	p.21

## 巻頭言

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私たちの文学部という新しい学び舎によるこそお越しくできました。また、卒業生・修了生の皆さんに向けて、晴れの日を迎えられたことについて、心よりお祝い申し上げます。社会人としての今後のご活躍を祈念しております。そして在校生の皆さんには、これまで以上に充実した大学生活を謳歌されますよう、鼓舞させていただきます。

さて、巻頭言としてはやや異例かもしれませんが、ここでは新入生の皆さんにぜひ「文学部・文学研究科教育促進支援機構」（以下、支援機構）のことを知っていただきたく、敢えてそうした趣旨で記させていただきます。

支援機構は、本学文学部・文学研究科の学生・院生・教員の全員が等しく「会員」として、それぞれに応じた資金を出し合い、文学部のためになる活動を展開している、他に類例のないユニークな組織で、実質的に学生たちの自発的・能動的な企画・運営からなっています。創設 20 周年に当たる 2023 年度に行われた具体的な活動内容については、この冊子の次頁以降をごらんください。ここでは、そこに記載されていない「新入生歓迎キャンプ」について触れたいと思います。

人と人の絆を結び、互いに高めあい学びあう場の創発を担う組織としての支援機構の特質を端的に体现するイベントがこの「新入生歓迎キャンプ」でした。それはコロナ問題が発生した 2020 年度から実施が見合わされていましたが、コロナ明けの時宜にかなって、2024 年 4 月、実に 4 年ぶりに再開する運びとなりました。新入生として新しい環境に入ろうとしている皆さんは、入学の喜び半分、心配半分といった気持ちでおられるのではと思います。この「キャンプ」は、2 回生以上の学生スタッフと随任教員が 1 泊 2 日の小旅行に皆さんを案内し、皆さんが大学生活にスムーズに移行できるよう手助けするイベントです（いかなせん参加人数に制限があることはご了承ください）。そこに参加すれば、その後の大学生活に欠かせないコミュニケーション力を培ったり、友達や先輩とのつながりを作ることができるようになるでしょう。

哲学者フッサールは、(誰にとっても)「私」は世界の一切(の意味)を構成する中心的存在であるにもかかわらず、その「私」が自己自身を知ることが原理的に不可能であり、「私」自身が客観的に何者であるかは他者の心的作用に捉えられている「私」を、他者への感情移入を通して間接的に知ることによるほかはない、という趣旨のことを述べています。自分のことは自分に一番わかっていそうですが、他者の存在と他者への関わりを欠いては、「私」は自分が何者であるのかについても実は規定できないのだ、という逆説的な命題です。このことの真実味を裏付ける現象がコロナの時期に生じました。人とのかかわりが希薄になり、自分自身の関心や行(生)き方を見失ってしまった人が増えたのでした。

さて、コロナはもはや過去のもので、「キャンプ」をはじめとする支援機構の活動はどれも、大学で、また文学部で、あなたが自分らしくありながら、他者との協働を通して新たな自分を発見する場となるでしょう。支援機構の活動に積極的に参画し、あなた自身のかけがえのない大学生活をぜひ充実したものにしてください。

大坂公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構  
2023 年度 会長 高梨友宏  
(哲学専修/哲学コース教員)

# 教育促進支援機構の活動

大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構（以下、支援機構）は、大阪市立大学創設 50 周年事業の一環として 2002 年に発足した、学生主導の公式団体です。2003 年刊行の「フォーラム人文学 No.0」では、学術情報総合センターが建設され、文学部棟の増改築などハード面の充実があった反面、学部生・院生の主体的な研究活動への公的支援の不足というソフト面の課題があったことが指摘されています。そこで、支援機構は文学部の学部生・院生・教員がより主体的な研究活動を行えるよう、またより実りある大学生活となるよう、有志の学生で企画を提案し形作る活動を、20 年以上続けてきました。

20 年以上前というと、ちょうどいま籍している学部生が生まれたころになります。設立時の精神を絶やすことなく受け継いでいるとはいえないかもしれませんが、ここまで積み上げられてきた支援機構の活動を、さらに次の世代へ繋いでいく、そのために今できる活動に全力で取り組んでいます。この冊子を手に取ってくださった方とも、企画に参加する、あるいは企画を運営するスタッフとして、この活動を共に盛り立てていきたい、それが私たちの願いです。

## 今年度の活動一覧

### 教育支援課

- ・履修相談会（3 月～4 月）
- ・学生によるコースガイダンス（10 月）

### 研究支援課

- ・勉強会・自主ゼミ支援事業
- ・共同活動支援事業
- ・研究誌出版支援事業
- ・研究奨励賞

### 会議日程

総会	臨時総会
4 月 28 日	6 月 15 日
	臨時総会についてのメール審議期間
	6 月 16 日～22 日

### 編集課

- ・文学部案内冊子『Make Your Journey!』発行（8 月）
- ・『フォーラム人文学 No.21』発行（3 月）

### 広報課

- ・春の公大授業（4 月）
- ・オープンキャンパス学生企画（8 月）

### 運営委員会

第 5 回	9 月 22 日
第 1 回	4 月 14 日
第 6 回	10 月 20 日（メール審議）
第 2 回	5 月 19 日
第 7 回	11 月 17 日
第 3 回	6 月 23 日
第 8 回	1 月 19 日
第 4 回	7 月 21 日
第 9 回	2 月 9 日（メール審議）

## 履修相談会 2023

履修相談会は、その名の通り大学の履修制度を解説し、大学における学びの見通しを立てるための相談が行える企画です。当初は新入生歓迎キャンプの一部として、大学における学びの意義などを学生で考え、それを新入生に伝え、またそこで新入生とも一緒に考えるようなコンテンツでした。現在は履修制度の解説と大学で学ぶ意義を伝え、それをふまえて班に分かれ、4 年間の見通しを考えながら 1 回生の履修予定を組む企画となっています。

この企画では、「ただ時間割を組むだけではない」という部分が非常に重要です。高校までの勉強とは異なり、自分の興味関心が今後学んでいくこと、研究していくことにつながってきます。それは新入生にとっても重要なことですし、解説・相談役となる上回生にとっても、自分の学びを振り返る機会となります。また入学当初に行われる企画ですので、今後大学生活を送るうえでのつながりを生む、そんな交流の場にしてもらいたいという思いもあります。

## 春の公大授業 2023

春の公大授業とは、主に高校生に向けて行われるイベントです。主に教員による模擬授業が行われますが、このイベントのプログラムの一部に「文学部生とのフリートーク」があり、文字通りそこでフリートークをします。秋に行われた年度もありましたが、基本的に 4 月下旬に行われるため、スタッフ側として初めて運営に携わる人も多い企画です。

支援機構の企画の中でも非常にカジュアルなもので、駅から 1 号館内の誘導、そしてフリートークの内容の設定をして、あとは当日の対応を行う、というシンプルな流れで企画制作が行われます。言葉にすると単純ですが、前年度の企画をどのようにブラッシュアップするか、どのように誘導するのが効率がよいか、雨天時などの対応はどうするか、といった下準備は欠かせません。イベント運営の難しさと面白さをお手軽に味わうことができます。

## 文学部案内冊子 2024

文学部案内冊子は、この文学部を紹介する冊子を、学生の手で作るという企画です。8 月のオープンキャンパスでの配布に向け、例年 2 月前後から準備を行い、4 月に入学する新入生も交えて冊子製作を行います。当初は若手の教員の手で作っていたそうで、当時の様子を何度も嬉しそうに語ってくださる先生もいます。さて、学生の手で冊子編集・出版まで行うということで、文学部に関する情報収集は必要不可欠です。各コース多数

の教員や学生に取材を行うため、編集スタッフ自らが文学部に詳しくなり、またその環境で学ぶことに対して自覚的になることができます。また、Illustrator や Photoshop などを用いた冊子製作を行うため、編集に関する知識や経験が得られるのも、この企画の大きな特徴のひとつです。主な読者は高校生ですが、大学に入学した後でも有用な冊子であるよう、さまざまな情報が詰まった冊子が毎年製作されています。

## オープンキャンパス学生企画 2023

オープンキャンパス学生企画は、教員と協働し、学生目線で大学や文学部の魅力を伝える企画です。ホームページや学部案内冊子では伝わりきらない、学生の雰囲気や大学の様子を、展示やトークコンテンツを通して受験生へ発信しています。また学部説明会の中でも、教員のあとに続けて、学生自身の興味関心や学んでいる内容、そこで感じる学びの意義などを伝えるなど、教員と密に連携を取りながら企画準備・運営を行っています。

この企画のやりがいとして語られるのは、なんといっても受験生との距離の近さとその熱量です。参加者から「知りたかったこと以上のことを知ることができた」という声や、「この文学部に絶対合格します！」と言ってもらえたこと、また 1 年後に大学生として再会できたときの喜びは、言葉にならないほど大きなものがあります。徐々に対面開催ができるようになってくる中で、企画の中でも群を抜いて活気づいていく企画ではないかと感じています。

## 学生によるコースガイダンス 2023

学生によるコースガイダンスは、教員によるコースガイダンスと並行して行われる、学生が各コースの学びを 1 回生に伝える企画です。この文学部は 2 回生からコースに配属されるという特性上、1 回生のうちに所属コースを存分に悩む時間があります。その判断材料のひとつとして、各コースの学生を集めて話す場を設けようという趣旨のもと、毎年開催されています。各コースの学生が一堂に会することはあまりなく、上回生同士の学びの交流の場にもし

たいと考え、企画制作が行われています。支援機構では、1 回生に毎年アンケートを取っており、その結果によると、入学時点で入りたいコースをしばっている人は半数程度存在します。しかし、1 年間存分にコース選択で迷い、悩んでほしいという思いがあります。各コースの学びの内容を説明することの難しさもありますが、それでもコースの情報を発信していくことには大きな意義があると考え、毎年企画を行っています。

## 2023 年度 卒業論文題目一覧

### ●哲学歴史学科

#### 哲学コース

荒木 陸

妊娠初期の中絶において女性が配偶者の同意を求められることの是非について

柴田 瑞生

ドイツ型憲法パトリオティズムにおけるアイデンティティ論

眞銅 勇亜

『ニコマコス倫理学』においてエウダイモニアと観想はどのように関係するのか

井上 綾太

音楽とは何か

岡崎 壮佑

現実社会と宗教の共存——ハラール認証制度を例に

斉藤 海斗

認められたいとは何か——サルトル『存在と無』及びそれ以後の観点から

早乙女 太一

なぜ、ブラックユーモアは愉快なのか

花原 さくら

現在はいつ過去になるのか

増岡 雄貴

愛とは何か——エーリッヒ・フロム『愛するということ』と手がかりに

三須 仁

「後悔」は無意味なのか

渡邊 桐子

被造者感情と現代人の関係

和田 詩菜乃

仏教は、業思想を受け入れながら、どのように生を肯定的にとらえるのか

#### 日本史コース

神樂所 勇太

古代国家のエミシ政策——移配政策の考察を中心に

鎌谷 祐里

信濃真田氏における公権性・家臣団の形成過程

木村 祐照

葛城地域の古墳の埴輪生産体制と対外関係の特質

久後 真

「百武三郎日記」から見る昭和天皇の開戦決意

篠原 直希

戦国期「境目」領主の存立形態についての一考察——美濃遠山氏を題材に

下村 めぐ

「怨霊」と古代社会

中野 良平

小学校創設期における学区取締と地域社会——大阪市街地を事例として

伏見 万柚子

特攻作戦の実態とその意味——当事者と第三者のエゴドキュメントと証言を素材に

益田 笑風

土地会社の経営・開発と「新世界」——大阪土地建物・阪南土地建物の営業報告書から

山田 存真

徴用工と学徒動員の当事者の論理——大阪陸軍造兵廠、中島飛行機を中心にー

横田 拓也

越前朝倉氏の支配構造とその変容——文書の発給・様式から見る

宮澤 元希

古代日朝関係における「任那日本府」の施設的作用について

#### 世界史コース

石原 美礼

唐代後半期の長安における市を中心とした商業活動——小説史料を手掛かりに

神代 蓮

19 世紀オスマン帝国の教育改革と国民統合——公教育法を中心に

松向寺 法道

英仏百年戦争における村落共同体の防衛活動について——南仏サン・ギレム・ル・デゼール村 (St.-Guilhem-le-Désert) の事例より

園部 裕人

スターリン期のソヴィエト体制に対するソ連市民の政治的評価の変遷——M. レダーの回想録を手がかりに

末原 壮馬

汪康年の変法観——清末知識人のもう一つの在り方

田中 柊太郎

9 世紀中期における唐の日本に対する見方

見勢 大器

グリモとサヴァランのテキスト比較——両者の食卓観における違いについて

安川 成実

カルロ・カッターネオとジュゼッペ・マッツィーニの思想対立について——1848 年ミラノ革命を中心に

愛甲 宇志

『列女伝』に見える女性の理想像と実像

### ●人間行動学科

#### 社会学コース

井村 春花

現代において「夢」を持つことの意味——芸術活動を行う者の語りを事例に

青松 美咲

弁当のレシビ本に見られる「望ましさ」——弁当とキャラ弁のレシビ本を比較して

朝山 朋音

明暗が分かれたコロナ禍の「野外音楽フェス」——情報拡散の流れとコンテンツ内容の比較から

姉川 光

メディア批判言説の社会学——「アウトメディア」を事例として

安部 莉生

SNS における美の規範

伊藤 香乃

ヤングケアラーはなぜ問題なのか——ヤングケアラー研究者の書籍を対象とした内容分析

植木 雄大

青年期孫が考える祖父の存在意義とは何か——学生による語りから

内田 安美

家庭内における共食の重要性

北 希望

働く女性の身体変化による困難と対処——月経に焦点を当てて

堂元 葵

高齢者の社会参加の要因分析

中江 雪乃

テレビドラマが描く家族構成と家庭内性別役割分担——1994 年と 2023 年の比較から

永友 由佳

アイドル育成とファンの位置関係——ジャニーズ事務所を事例に

原 七菜子

リメイク作品における表現の分析——映像作品のポリティカル・コレクティブの視点から

福井 航

社会学的アンビバレンスの概念を用いた大学生のきょうだい研究——家事をめぐるきょうだいの語りから

藤原 明日香

ラジオリスナーによる X 上のオンライン・コミュニティの様相

古川 茉奈

高齢者の生きがいとアイデンティティの規定要因

安川 佑佳

“コロナ禍”における大学生の主観的幸福感

李 惟肖

第三者が関与する生殖補助医療を同性カップルが利用することに対する態度の検討

筒井 優

大阪市における部落問題学習の現状と課題——学校教員へのインタビューから

波々伯部 直希

性的少数者支援と当事者によるその評価——同性パートナーシップ制度を事例に

#### 心理学コース

大橋 朋佳

ハトのセルフ・コントロール選択に及ぼす報酬量効果

阿部 真衣奈

集団から他者を排斥するオストラシズムがどのような根拠によって正当化されるのか

西尾 歩未

フォントは性格推定の手がかりとなり得るか

伊藤 和

道徳ジレンマ問題における日本人の責任回避——日仏比較調査による検討

加藤 未紘

物語世界への没頭傾向は読書に対するモチベーションを高めるか

澤 楓花

大学生における先延ばし行動——課題量が実際の行動に与える影響の検討

城臺 祐作

選択場面における遅延と確率の作用——価値割引モデルによる予測

碩 雅人

個人主義的文化圏の国と集団主義的文化圏の国における自己嫌悪の傾向の差異についての検討

田崎 海渡

ラットのセットシフティング能力に及ぼす新生仔期

MK-801 反復投与の影響

寺田 実生

ゴミ箱の分別正確性を上げる仕掛けの効果

永山 心萌

社会場面における金銭報酬の意思決定に関する報酬量の効果

西上 春香

色がもたらす時間知覚の変化と遅延価値割引現象との関連について

西川 愛優

気分が感情価を持つ単語の虚偽記憶に及ぼす影響

二和田 こもも  
こども隙間転落防止プロジェクトの効果検証——防護動機理論に基づく分析  
登 丈士  
根拠の提示による星座占いへの信用度を与える影響  
中村 沙椰  
共有経験が集団にもたらす意味——内集団本質主義と公共財ゲームを用いた検討  
原田 かのん  
信頼するほど同調しない？——集団への信頼の度合いが同調行動に与える影響について  
福楽 彩純  
異なる信念を持つ相手への関与意欲——原子力発電の利用に対する信念の強さの規定因  
藤田 千寿世  
他者の視線とやりがいの有無がパフォーマンスやモチベーションに与える効果  
益田 響輝  
繰り返し型囚人のジレンマ状況における言語的フィードバックが協力選択に与える効果  
松本 小春  
逸機時期とその不確実性がもたらす後悔予測への影響  
吉年 遼一郎  
負の情動を喚起する刺激に対する接近の個人差についての研究

#### 教育学コース

西村 優希  
遊び・競技としてのトリッキング——アーバンスポーツの競技化への態度の一考察  
上野 桃佳  
日本語学習者の移住生活を経た職業選択における就労意識——日本在住日本語学習者へのインタビューを通して  
岡田 伊織  
教育支援センターの機能強化における ICT 利用の実情  
宇戸 李花  
教育虐待の特徴と傾向——毒親告発本の分析を通して  
芦田 千奈  
個別最適な学びを実現するための教員のアプローチと定着に向けた方策——自立した学習者の育成を目指して  
香川 夏海  
教師に対する社会の認識——アニメーション映画における脇役教師の分析を中心として  
川原 詩織  
論理的思考力育成の手段としての推理ゲーム——『逆転裁判』シリーズを分析して  
津田 優美香  
子ども同士のインクルーシブな関わりを促進する教師のア

プローチ  
羽戸 さくら  
居場所の観点からみる学校場における学校図書館の機能——学校司書に着目して  
山村 稜央  
1990年代の「学び」論がもたらす学校教育の“倒錯”について——学力論争の知見を踏まえて  
山本 夏女  
習い事の意義と自治体による習い事助成の必要性についての検討  
巖 琳佳  
学校における国際児のアイデンティティ形成について——「自己過程サイクル」の観点から

#### 地理学コース

岩石 ひなた  
宝塚市中心部の雑然とした住宅地形成の経緯——華やかな都市イメージとの乖離に焦点をあてて  
瀧下 祐紀名  
大阪府におけるキッチンカー事業の実態に関する研究

#### ●言語文化学科

##### 国語国文学コース

秋田 真佑  
『西鶴諸国ばなし』巻二の五「夢路の風車」における西鶴の「はなし」の構成方法について  
越智 一希  
谷崎潤一郎『痴人の愛』讓治の教育によるナオミの娼婦性  
加藤 朱莉  
鷹取観音靈験譚の変容  
北口 十志充  
江島其磧の気質物三作品における『浮世親仁形氣』の価値——「親父」をめぐる  
米中 七海  
ファッション雑誌における語彙・文体の変化  
西藤 千浩  
男性的言葉遣いについて——文末表現に着目して  
田中 楓  
「さわり」の意味の拡大についての考察  
谷川 真悠  
織田作之助 初出「俗臭」・改稿版「俗臭」・「素顔」草稿・原稿における登場人物と物語の変化  
西部 晃大  
『宇治拾遺物語』における「三」の反復  
野坂 咲花  
『本朝法華験記』における『法華経』の受容  
平井 菜七子  
武者小路実篤「お目出たき人」——主人公の自我について

福岡 玲海  
『源氏物語』の現代語訳——関西弁の使用  
福本 侑真  
現代日本語の入手動詞のニュアンスの違いについて  
藤井 春花  
『落窪物語』における報恩について  
舟津 綾  
『平中物語』における主人公像の形成について  
町田 健太  
新しい方言「せわ」の発生とその用法について  
松井 美樹  
覚一本・延慶本『平家物語』における平宗盛の人物像  
松本 凌河  
『春雨物語』『死首の咲顔』の最終稿と秋成の「孝」——『諸道聴耳世間猿』『孝行は力ありたけの相撲取』を基に  
山本 真理  
『枕草子』『すさまじきもの』章段における笑いとその方法

##### 中国語中国文学コース

赤澤 ななみ  
映画「全城高考」から見る中国学歴社会の実態  
緒羽 媛清  
宋代以降における韻書の変容  
小林 知佳  
中国アニメ・漫画作品『羅小黑戦記』の霊域について

##### 英米言語文化コース

上代 萌々子  
Changes of Gender Images in Movies  
濱中 夢  
マイケル・アルメレイダ『ハムレット』(2000)におけるハムレットとオフィーリアの苦悩の考察——監督の意図・翻案方法に着目して  
宮川 柚果  
坪内逍遙のシェークスピア翻訳における翻訳観の変遷——『ハムレット』翻訳に着目して  
山野 空良  
『ロミオとジュリエット』におけるジュリエット像の変遷——児童・女性向けに翻案された作品を比較して  
中山 礼実  
『八月の光』論——リーナ・グローブとジョー・クリスマスとのコントラストの根源は何か  
飯塚 裕希  
ゴシック小説の転換点——H. P. Lovecraftの“Outsider”とE. A. Poeの“Berenice”の比較を通して  
岡田 美桜  
新しい方言としての河口域英語 (Estuary English) ——ハンバーサイドに着目して

新居田 皓子  
The Difference in the Willingness to Work between Japan and America  
大川 純花  
Freedom and Madness in Swinging London  
山形 璃梨  
日英語における時間移動の方向性についての考察

##### ドイツ語フランス語圏言語文化コース

##### ドイツ語圏言語文化領域

田村 美奈  
ミヒャエル・エンデの目に見えない世界への意識を探る——『モモ』を手がかりに  
齊藤 由紀乃  
ドイツ語における新語の名詞の性とその傾向

##### フランス語圏言語文化領域

柿本 花乃  
エマニュエル・ポーヴMes amis——臆病な視線が映すもの  
阿世知 果林  
TRPG リプレイ文化から見る日仏の文化差に関する考察  
清原 咲良  
クレージュのミニスカートが象徴するものとは——ボードリヤールの記号論の観点から  
小島 奈々海  
ガストロノミーと持続可能性——フランス美食文化は現在どのように生き続けているのか  
朱 参商  
大学における異文化交流を促進するための居場所づくりについて——留学生および在学生の心理的安寧性の観点から

#### ●文化構想学科

##### 表現文化コース

木原 彩  
ライブ性再考——何がライブをライブたらしめるのか  
相曾 乙葉  
ロングコートダディ論——演者と観客との心理的距離  
梅野 新大  
時間を視る——マンガの時間について  
金子 萌衣  
グループアイドルと CGP からみる歌唱における自己——歌詞の「私」や「僕」の解釈の揺らぎをめぐる考察  
河合 健太  
なぜ日本の女性アイドルは生徒化されるのか  
河村 春希  
映画『ブラックパンサー』論——ワカンダと黒人の表象を中心に

香村 帆風  
テレビドラマの登場人物の行動を通じた現代女性表象の考察——『アンナチュラル』を題材に

藤 美友  
異性配役におけるジェンダーの描写と意義——『男子校にはいじめが少ない?』を事例に

細谷 夏帆  
インターネット時代におけるK-POPアイドルミュージックビデオ

山口 遥  
宮崎駿アニメーションの動画としての特徴——『天空の城ラピュタ』と『On Your Mark』を題材に

吉田 芽生  
個々の受容におけるキャラクター——同一性の揺らぎとゲーム経験への接続

林 菜亜耶  
ヒップホップダンスと「現代的なリズムのダンス」の相違

#### 文化資源コース

川崎 遥賀  
日本におけるアイリッシュ文化の受容について——関西のアイリッシュパブを中心に

田中 佐季  
帰国子女のライフコースとキャリアに関する研究——若年層の帰国子女を対象としたアンケート調査を通じて

岸 若夏  
テレビにおける甲子園野球の描かれ方に関する研究——選手を取り巻く人々に着目して

岸本 渚  
食欲と購買意欲を誘発される効果的な食品パッケージに関する研究——青色の効果に着目して

倉本 菜摘  
お笑い文化と内輪ネタ——ファンの二極化と優越意識をめぐって

小西 直旺人  
「ティーンエイジャーと大人の関係性」から見た新海誠

真田 涼花  
日本人アイドルの海外進出——K-POPアイドルとの関連から

杉本 穂花  
小劇場演劇の今日的な発展戦略の中でのみる『TRUMP』シリーズの展開の独自性について

高木 莉奈  
動物園を活用した環境教育の現状と可能性——天王寺動物園を事例にして

田中 茜  
ホーロー看板の文化資源化とその経緯

深尾 真帆

現代日本における土産品の多様性についての研究——ご当地性の付与の仕方に注目して

前田 美和  
「ブリキア」シリーズが映す女兒の友人関係の特質の変容

三輪 菜摘  
現代のVTuberをめぐるキャラクター性の構築に関する研究——VTuberコミュニティにおける相互作用に注目して

米川 明音  
現代の絵葉書活用の実態と価値——絵葉書に関連する4団体の事例分析をもとに

渡辺 千尋  
宝塚ファンの考える「宝塚らしさ」についての考察

和田 百々葉  
観光まちづくりにおける主体の多様化とネットメディアの影響に関する研究——高知県観光キャンペーン「リョーマの休日」を事例として

鳥羽 映美利  
社会包摂・地域密着型アートプロジェクトの現状と課題——ブレイクアプロジェクトとHAPSを中心に

#### アジア文化コース

久保田 佑亮  
中国ゲーム産業史からみる、『原神』が与えたゲーム産業への影響

米川 朋希  
ジャカルタ日本人学校が提供する教育の特徴と、生徒にもたらす影響についての研究

譚 涵月  
現代中国都市部における母親の娘に対する教育意識——韓国、日本を参照項として

渡慶次 理緒  
創作物で見る沖縄差別——戯曲・人類館を例として

## 2023年度 修士論文・博士論文題目一覧

※今年度の博士課程修了者がいないため、修士論文タイトルのみを掲載

### ●哲学歴史学専攻

#### 哲学専攻

##### 《修士論文》

阪本 涼太郎  
アバター存在論の試み——私の第二の身体

清水 大毅  
変化に対する永久主義的アプローチ

#### 日本史学専攻

##### 《修士論文》

吉田 紺碧  
足利・織田両権力下における今井宗久の活動

山下 矢  
山城国石清水八幡宮の経済構造の変遷

Estrada Rees Carlos  
近世巨大都市大坂における土船仲間と土流通

谷内田 智成  
近世巨大都市京都における藩邸社会

#### 東洋史学専攻

##### 《修士論文》

王 智博  
宋代神宗期の党争——詔獄事件を中心に

徐 静  
宋代江西の士大夫と宗族——鄱陽洪氏一族を手がかりとして

陸 徐晨  
宋代における国家と地方武装勢力とのせめぎあい

趙 旭丹  
紹興の橋——紹興古橋と地域社会の研究

#### 西洋史学専攻

##### 《修士論文》

中瀨 大貴  
1989 / 90年の東ドイツ側の新しい文化政策に向けた取組みと『統一条約』への影響——東ドイツ芸術家保護連合の活動を中心に

多田 向日葵  
第一次世界大戦初期のドイツにおける大量屠殺措置「豚殺

し」の言説分析

### ●人間行動学専攻

#### 社会学専攻

##### 《修士論文》

王 希予  
COVID-19パンデミック前後における2.5次元ミュージカルの変容——中国観客の劇場観覧・オンライン配信の体験談を通して

渡邊 雅子  
複合差別を生きる——外国人シングルマザーの事例から

西田 紘菜  
音楽イベントにおける場所の創造と継続——「伊丹オトラク」にかかわる人びとの相互作用に着目して

華 語盈  
メディアにおける理想的なマスキュリティをめぐるせめぎあい——中国のスターオーディション番組に現れる男性表象を事例として

#### 心理学専攻

##### 《修士論文》

宮本 健利  
香川県ネット・ゲーム依存症対策条例への賛否は直感的・感情的判断に基づいているのか

#### 地理学専攻

##### 《修士論文》

本多 忠素  
大阪府を事例とした納骨堂の増加——供給主体に着目して

松田 千優  
市街地改造事業地区における再々開発の難航についての事例研究——慣習・法制度・関係者の行動に着目して

伊藤 航  
AED「公共アクセス化」施策の実態と評価——「堺市消防局まちかどAED」を事例に

### ●言語文化学専攻

#### 国語国文学専攻

##### 《修士論文》

石 善栄  
『大日本国法華経験記』の普賢菩薩説話とその背景

楊 思微  
芥川龍之介未定稿「胡蝶夢—A Parody」の考察

#### 中国語中国文学専攻

##### 《修士論文》

夏 懋  
关于陆游与唐琬的考察——沈园诗词中的遗憾

何 佳陽  
钟孟宏电影研究 ——从文本、视听和美学特点来分析其作品风格和成因

**英語英米文学専修**

**《修士論文》**

蘆田 光平  
The Interaction between the Narrator and the Reader in George Oppen' s Poetry  
杜 博暦  
The Triple Prism of Selfhood: the "I" in Emily Dickinson' s "My Life had stood—a Loaded Gun"

**ドイツ語フランス語圏言語文化学専修**

**《修士論文》**

砂原 信恵  
ショコラの歴史から考察するフランスの美食文化とショコラ・ジャポネの創造的可能性

**言語応用学専修**

**《修士論文》**

張 雪  
日中翻訳における終助詞と語気詞の対称性についての一考察——ドラマにおけるジェンダーロールに着目して  
下田 隆太  
文章理解におけるリヴォイスの効果の実証および作用についての検討——共通認識の構築に着目して

**●文化構想学専攻**

**文化資源学専修**

**《修士論文》**

安見 一葉  
ミュージアムと学校を繋ぐ造形活動プログラムに関する研究  
梅 笑寒  
橋口五葉の作品に見られる西洋影響  
王 談  
日本における中国人観光客のコンテンツツーリズムに関する研究——ソーシャルメディアが誘発するからアニメ聖地巡礼を事例として

## 2023 年度 支援機構 研究奨励賞論文

**研究奨励賞とは？**

文学部に在籍する大学院生の研究活動を奨励し、経済的な支援を行うべく、教育促進支援機構が顕著な研究業績に対して授与している賞です。

車明釗（しゃめいしょう）／言語文化学専攻 中国語中国文学専修 後期博士課程 3 年

「以器载道——从武器观角度论中国“狄仁杰”系列和日本“浪客剑心”系列电影的特点和内涵」

天野 沙織（あまの さおり）／言語文化学専攻 フランス語圏言語文化学専修 後期博士課程 1 年

「ワインテイスティングの社会的役割とは何か——その誕生と地位の確立を背景に」



## 運営組織 & 2023 年度運営委員一覧

### 運営委員会とは

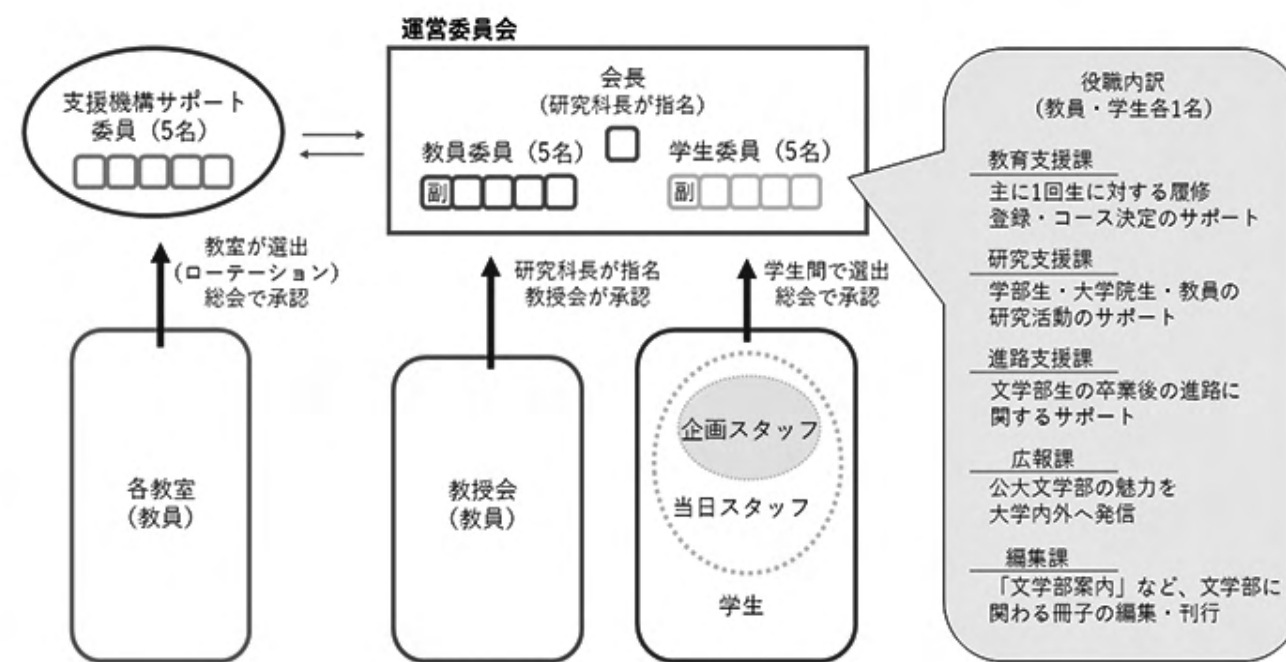
支援機構は、文学部・文学研究科に所属するすべての学生・教員が会員です。そして、この組織運営のために、会長、教員運営委員（5名）、学生運営委員（5名）から構成される運営委員会が存在します。教員運営委員、学生運営委員のうち、それぞれ1名が副会長を務めます。支援機構は、文学部・文学研究科の中で学生と教員が協働し、実りある学びを創発するための組織ですが、学生と教員の橋渡し役を担っているのが運営委員会です。

運営委員会では、さまざまな事業の企画・立案、またその企画の実施のための議論や調整を行います。運営委員会の中でも、事業の内容によって5つの課に分かれており、教育支援課、研究支援課、進路支援課（※）、広報課、編集課がそれ

ぞれ事業を実施しています。たとえば、広報課は学外の方々へ向けた事業として、春の公大授業やオープンキャンパス学生企画を担当していますし、編集課は文学部案内やこのフォーラム人文学の編集・発行を担当しています。

運営委員会では、これらの事業内容について月1回程度会議を行い、新事業の提案、事業の進捗報告、事業内容の審議などを行います。また、サポート委員（教員5名）はこうした事業の遂行を実務面でサポートします。

※今年度の進路支援課は合宿準備課として、新歓キャンプの復活に向けた準備・調整を行っています。



### 支援機構メンバーについて

支援機構の特徴として、各事業におけるスタッフはメンバーを固定していません。準備段階から企画を形作る企画スタッフも、企画運営を支える当日スタッフ・サポートスタッフも、実施する事業ごとに学生を募集しています（スタッフ募集のお知らせは主にUNIPAと支援機構メーリングリストで発信しています）。そのため、学生は誰でも企画スタッフや当日スタッフ・サポートスタッフになることができます。

もちろん、新企画の提案や、「今の文学部・文学研究科にこういった場があればいいな」といった声も随時受け付けてい

ます。昨年度には、「さまざまな文学部生と楽しく交流するだけの場を作りたい」との思いから、「りてら café」という小企画も1年間開催されました。お昼ごはんを食べながら、好きな本・漫画を話したり、自分の「推し」についてゆるく交流する集まりを月2回ほど行うなど、回生やコースの垣根を超えた交流を生んだ点で、とても有意義な企画でした。どのような意見でも大歓迎ですので、何かアイデアがある方は、ぜひお気軽に学生運営委員へお声がけください。

### 運営委員会メンバー (2023 年度)

会長	高梨友宏(哲学)
教育支援課	大岩本幸次(中国語中国文学、副会長兼任) 辻井愛莉(社会学2回生)
研究支援課	古賀哲男(英語英米文学) 本堀萌菜美(教育学3回生)
広報課	橋本博文(心理学) 田中亮多(教育学2回生)
編集課	濱本真実(世界史) 山口光(日本史2回生)
進路支援課 (2023年度は合宿準備課)	天野景太(文化資源) 深尾真帆(文化資源4回生、副会長兼任)

### サポート委員 (2023 年度)

川野英二(社会学) 齊藤紘子(日本史) 菅野拓(地理学)  
丹羽哲也(日本史) 長谷川健一(ドイツ語圏言語文化)



## 教育促進支援機構 2022 年度決算

対象期間 (2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日)

収入

摘要	①予算額	②決算額	備考	差額 (②-①)
会費	-	350,000	1 回生： 15,000円×22名、4000円×3人 前期博士課程：0名 後期博士課程：8000円×1名 学年不明：0名	-
会費（教員）	-	340,000	2020年度10,000円×3名 2021年度10,000円×5名 2022年度8,000円×36名	-
前年度繰越金	1,530,062	1,530,062		0
その他	500	3		▲ 497
計	1,530,562	2,220,065		689,503

支出

摘要	①予算額	②決算額	備考	差額 (②-①)
教育	90,000	36,869	新入生歓迎企画(WF22):36,414円 夏のコースガイダンス(CG22):455円	▲ 53,131
研究	1,154,000	807,645	各種支援・表彰	▲ 346,355
進路	10,000	-		▲ 10,000
編集	200,000	74,108	フォーラム人文学印刷費	▲ 125,892
広報	50,000	23,026	オープンキャンパス：21,019円 りてらCafé：2,007円	▲ 26,974
懇親	30,000	-	卒業式後の懇親会への補助（中止）	▲ 30,000
事務局	0	-		▲ 5,000
事務文房具費	100,000	27,980	プリンターインク、支援機構用印鑑 (市大->公大)	▲ 72,020
機材購入費	30,000	28,820	小会議室PC修理代	▲ 1,180
ソフトウェア購入・更新料	40,000	-	Adobeアカウント料金	▲ 40,000
人件費	100,000	88,000	2019年度途中に予算100,000円に増額	▲ 12,000
手数料	15,000	10,901	会費納入時の振込手数料 支援費・各企画費用振り込み時の振込手数料	▲ 4,099
その他	10,000	-		▲ 10,000
次年度繰越金	1,239,791	-		353,169
計	3,068,791	1,097,349		▲1,971,442

## 教育促進支援機構 2023 年度予算

	予算	備考
教育	50,000	履修相談会、コースガイダンス
研究	704,000	優秀卒論賞(15) 5,000円/1件
		優秀修論賞(15) 10,000円/1件
		研究奨励賞(3) 20,000円/1件
		共同活動支援事業(3)上限30,000円/1件
		研究費出版支援事業(10)上限30,000円/1件
		勉強会・自主ゼミ支援事業(3)上限5,000円/1件
		卒論セミナー：3,000円
		賞状40枚：5,000円
筒36本入り：6,000円		
新歓キャンプ	70,000	2024年度新歓キャンプの下見、物品購入等
編集	100,000	フォーラム人文学350部程度の印刷費
広報	45,000	オープンキャンパス
懇親	20,000	
事務文房具費	50,000	プリンターのインク、輪転
機材購入費	30,000	PC修理代、台車の購入費
ソフトウェア購入・更新料	40,000	フォーラム人文学用Adobeアカウント費等
人件費	100,000	
手数料	15,000	
その他	5,000	
合計	1,229,000	
次年度繰越金	1,239,791	
(次年度繰越金 - 合計)	▲10,791	

## 大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構会則

制定 令和5年7月1日

(名称)

第1条 本会は、大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構 (Society for the Promotion of Education at School of Literature and Human Sciences, Osaka Metropolitan University) と称す。

(目的)

第2条 本会は、文学部・文学研究科の教育・研究に関する会員の活動を相互に支援・助成し、親睦と交流を図ることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 教育活動の推進
- (2) 学部生・院生による研究活動への支援
- (3) 学部生・院生の進路選択への支援
- (4) 定期刊行物の発行
- (5) 学外に向けた活動への支援
- (6) 会員の親睦・交流
- (7) その他、本会の目的にとって適当と認められる事業

(会員)

第4条 本会は、次の会員をもって組織する。

学生会員……文学部学生及び文学研究科院生

教員会員……文学研究院又は文学研究科又は文学部に関係する教員

賛助会員……本会の目的趣旨に賛同し、所定の会費を納入する個人又は団体

(役員)

第5条 本会に次の役員をおく。

(1) 会長 1人

文学研究科教員のなかより研究科長が指名により選出

(2) 副会長 2人

教員と学生から各1名、運営委員の互選により選出

(3) 運営委員 10人

教員運営委員(5人)は、文学研究科教員の中より文学研究科長(以下「研究科長」という。)が指名し、文学研究科教授会の承認を得て選出

学生運営委員(5人)は、学生会員のなかより選出

(4) サポート委員 5人

教員会員のなかより教授会の承認を得て選出

(5) 監事 2人

学生会員、教員会員からそれぞれ選出

(役員任期)

第6条 役員任期は、1年とし、再任を妨げないが連続3回までとする。ただし、欠員等が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(役員任期)

第7条 役員任期は、次のとおりとする。

- (1) 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。
- (3) 運営委員は、運営委員会を組織し、会則の定めるところに従い本会の運営について審議し会務を執行する。
- (4) サポート委員は、運営委員会による会務の執行を補佐する。
- (5) 監事は、本会の業務及び会計を監査する。

(会議)

第8条 本会の会議は、総会及び運営委員会とする。

第9条 総会は、毎年1回開催し、本会運営の基本方針を決定し、学生運営委員及びサポート委員を選出する。ただし、会長が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。また、会員の3分の1以上の要求がある時、会長は臨時総会を開催しなければならない。

第10条 運営委員会は、月に1回開催し、会務運営について審議し、企画立案書・予算案その他重要な会務について運営方針を決定する。

第11条 運営委員会は、半数以上の出席で成立し、議事は、出席者の過半数で決定する。総会に出席できない場合は委任状をもって議決権を行使でき、議事は、委任状を含めた出席者の過半数で決定する。

(経費)

第12条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入金をもってこれにあてる。

(会費)

第13条 会費(年会費)は次のとおりとする。

教員会員 10000円

学生会員 5000円

賛助会員個人 1口10000円以上、団体 1口50000円以上

(会計年度)

第14条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(予算及び決算)

第15条 本会の予算、決算及び事業計画は、総会の承認を得なければならない。

(その他)

第16条 本会会則の施行に必要な細則は、運営委員会に諮り会長がこれを定める。

第17条 本会会則は、総会の委任状による出席者を含めた出席者の3分の2以上の多数でこれを改正することができる。

附則

この会則は、令和5年7月1日から施行する。

## 大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構運営委員会内規

制定 令和5年7月1日

第1条 大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構（以下「支援機構」という。）の会務運営・執行機関として、運営委員会をおく。

第2条 教員運営委員は、文学研究科長の指名により、教員会員の中から文学研究科教授会の承認を得て選出する。

第3条 学生運営委員は、学生会員の中から、前年度学生委員が候補者を推薦し、総会の承認を得る。

第4条 教育支援、研究支援、進路支援、編集、広報の事業ごとに担当する委員をおくほか、文学研究科との共同事業に関しても担当の委員をおく。

第5条 教員会員、学生委員ともに運営委員の選出は、前年度中に行うこととする。

附則

この内規は、令和4年4月1日から施行する。

## 編集後記

『フォーラム人文学』第21号をお届けしました。

フォーラム人文学は、支援機構のその一年の活動を新しく知る、または振り返る機会とすることを目的とした機関紙です。大阪公立大学文学部・文学研究科にかかわる、あらゆる学びを支援するために行ってきた活動を、皆様に公表する役割を担っています。

この冊子に掲載したような支援機構の活動も、そしてこの冊子の製作も、多くの方にご協力いただくことで成り立っています。本冊子の製作にご尽力いただいた、支援機構会長の高梨先生、編集課の濱本先生をはじめとした皆様に、略儀ながらこの場を借りて御礼申し上げます。

『フォーラム人文学』第21号 編集スタッフ一同

編集担当

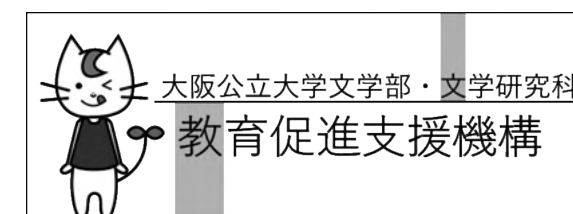
(教員)

濱本 真実

(学生)

4回生：姉川 光

3回生：森 百夏



フォーラム人文学

—ひらけゆく世界 見えてくる人間— No.21

発行日 2024年3月31日

編集・発行 大阪公立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構

〒558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本 3-3-138



Blank lined page for writing.

Blank lined page for writing.

Blank lined page for writing.

Blank lined page for writing.